

聖書：ピリピ人への手紙2章19～30節

説教題：仕える者たち

1 テモテとエパフロデト

パウロはエルサレムで逮捕され、裁判を受けるためにローマへ送られます。それを伝え聞いたピリピの教会は、テモテとエパフロデトをパウロのもとに送りました。ふたりはパウロと面会し、その後、まずエパフロデトが先にピリピに帰ることになります。そこでパウロは、ピリピの教会宛に手紙を書き、エパフロデトに持たせた。それがこの手紙になります。

今日のところでパウロは、テモテとエパフロデトのことについていろいろ書いています。繰り返し「仕える」ということばが出て来ます。

主イエス・キリストも、「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなものしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい」と言われました。(マルコ9章35節)ですから、皆さんも「仕える」とはどんなことなのか、日頃から気になっているはずです。そこで今日は、「仕える」とはどんなことなのか、テモテとエパフロデトのことから考えていきます。

1) テモテ 同じ心となって心配する

まずテモテのことから見ます。テモテは、二十歳のころにパウロに見いだされ、パウロのもとで伝道者として訓練を受けました。後にはパウロの代理を努め、大きな働きを任せられるようにまでなります。そういう関係ですから、パウロにとってテモテは大切な自分の息子のようなものです。そんな背景があるの

で、22節でこんなことを言うのは不思議ではありません。「しかし、テモテの立派な働きぶりは、あなたがたの知っているところです。子が父に仕えるようにして、彼は私といっしょに福音に奉仕して来ました。」

「子」とはテモテのことで、「父」とはパウロのこと。直接にはそういうことです。けれども、それだけではない。子とはイエス・キリストのことであり、父とは子なるイエス・キリストの父なる神。そのようにも考えることができます。テモテは、まるで主イエスが父なる神に仕えるかのように、私に仕えてくれた。パウロはそのようにも言っています。

ではいったい、テモテはどのような仕え方をしたのか。具体的な説明が20節にあります。「テモテのように私と同じ心になって、真実にあなたがたのことを心配している者は、他にだれもいないからです。」

テモテがパウロのところに来たとき、ピリピ教会の様子を事細かに報告したでしょう。ピリピ教会にはたくさんの恵みがありました。いっぼう、深刻な問題が起きていました。同じキリストを信じていると言いながら、十字架を敵とするような歩み方をする者や、天の御国のことではなく、地上のことだけを思って歩んでいる人たちが現れました。いまやその人たちは、かなりの力を持ち、無視できない存在となり、そうでない人々を苦しめるようになりました。心配したテモテは、この機会を利用してパウロから助言をもら

えればと願っていました。

テモテは、パウロといっしょに福音に奉仕し、パウロに仕えてきました。そしてこの時、テモテはパウロと同じ心になり、真実にピリピのことを心配した。そのようにして彼は仕えてくれた。そういうことになります。

2) エパフロデト 死ぬばかりになる

次にエパフロデトを見ます。彼はパウロのところで重い病気にかかり、死にかけました。なんとか神のあわれみによって助かりはしましたが、体力の回復を待つためにしばらくのパウロのもとで静養しなければなりません。そんな状態ですから、なにかをしようとすることもできるはずはありません。ところが30節にこうあります。「なぜなら、彼は、キリストの仕事のために、いのちの危険を冒して死ぬばかりになったからです。彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかった分を果たそうとしたのです。」

エパフロデトはピリピの教会の人たちができなかったことを、代わってしてくれた。どのようにしてか。キリストの仕事を果たすために、重い病気にかかり死にかける。そんなふうにして彼はパウロに仕えてくれた。そう言うのです。

2 仕える

今ふたりのことを簡単に見ました。普通、「仕える」と聞いたら皆さんはどんなことを頭に思い浮かべるでしょうか。教会のために何かの奉仕をする。困っている人や弱っている人のために、何かをする。教会に関係することだけとは限りません。道路を歩いていてゴミが落ちていたら拾って持ち帰る。そういう小さなことも仕えるというでしょう。いず

れにしても、ほかの人のために自分を犠牲にする。そんなふうを考えていると思います。

ではテモテとエパフロデトの場合はどうでしょうか。テモテはパウロと同じ心になってピリピの教会のことを心配しました。それが仕えることの一つの現れだと言っています。意外に思いませんか。

エパフロデトのこともそうです。彼は何をしましたか。パウロの所に来てすぐに倒れてしまいました。何もできない。いや、かえってパウロを心配させ、ピリピの人たちにも心配をかけてしまった。この世の常識から言えば迷惑をかけただけです。少し厳しい言い方をすれば、体力に自信がないのなら最初から来るべきではなかった。彼の判断は甘い。そう言われても言い訳できません。

数ヶ月前のことですが、ヨットで太平洋を横断していたテレビでも有名な方が、何かに衝突してヨットが浸水してしまい、救助を求めて助けられたという事故がありました。判断が甘いとか、軽々しく救助を求めるべきではない、もっとがんばるべきだったとか、いろいろな非難の声があったようです。

エパフロデトの場合もこれと似ています。しかしパウロはこう言います。「彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかった分を果たそうとしたのです。」

迷惑をかけられたとか、判断が甘いとか、そんな非難のことばではなく、逆に、彼はピリピの教会人たちができなかった分として、このようなかたちで仕えてくれたのだと言うのです。

3 仕える者となられたイエス

1) 父の御心とひとつとなる

今まで思い描いていた「仕える」という姿

と大きくかけ離れていませんか。人に迷惑をかけたり、心配させることも「仕える」ということなのか。そんな疑問を持たれたのではないですか。

「仕える」ということを正しく理解するために、主イエスの姿から学びたいと思います。

そのことを最も象徴的に現す出来事として、ゲッセマネの祈りを取り上げます。主は、祭司長や長老たちから差し向けられた群衆の手に落ちる前、このように祈ります。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにではなく、あなたのみこころのようになさってください。」(マタイ 26章 39節)

主は十字架の苦しみをお受けになるために、私たちの所へ人となられて来ました。この方は神だから、十字架におかかりになるとき、何も苦しまなかった。神の力で十字架の苦しみを乗り越えた、と思っはなりません。神である方なのに、人となられたのです。罪のない方なのに罪ある者となられたのです。人として十字架のさばきを受けなければならないのです。主がこのように祈らなければならないほど苦しみました。それほどの苦しみであったことを、私たちはもっと知るべきなのでしょう。

けれども、そうは言ってもなかなか実感がわかない。それが実情です。理由があります。私たちは生まれたときから罪ある者として今日まで歩んできました。あまりにもそれが当たり前なので、鈍感になってしまい、わからなくなっているのです。そもそも罪がなにかわからない。それがどれくらい私たちを苦しめているか。残酷なことか。いかに悲惨なことなのか。ぴんと来ない。ですからさばきもわかりません。

罪のない方である主だけがわかります。真正面から感じ取られるので、こう言うのです。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。」

急に怖じ気づいたのだとか、救いの計画に疑問を持ったのだとか、そんなことでは決してありません。こう祈らざるをえないのです。これほどのさばきを受けなければならない。必死に祈られる主の姿から、私たちが抱えている罪の重さがかえって浮き彫りになります。

主は、三度目の祈りの中で、父のみこころと一つになる決心をされます。私たちを心配し、救うためにそのような道を選ばれました。

テモテは、パウロと心一つにしてピリピの人たちを心配しました。ピリピの問題について、当初パウロとテモテは違う意見を持っていたのかもしれない。心一つにすることははじめは難しく感じられたかもしれない。けれどもテモテはパウロと心一つにする道を選びます。このようにしてテモテは仕えていきました。

2)いのちをかけて私たちのことを心配するイエスが受けられた十字架。この世の常識では、こんな評価になるでしょう。十字架で何ができたのか。弟子たちに大きな希望を与えておきながら、死刑の判決を受けて殺される。そうやって人々の夢を砕き、希望を失わせた。それなら何もしない方が良い。迷惑をかけるだけだ。十字架で主が死なれていくところだけを見るならそのとおりです。

しかし、もし十字架がなかったのならどうなっていたのでしょうか。十字架の前で「十字架から下りてみる」と言いたい放題に主をのしっていた、私たちこそ十字架にかからな

ければならなかったのではないですか。主は何もしていなかったのではない。主は、私たちのいのちを心配し、ご自身のいのちをお捨てになられました。

エパフロデトのこともこれと重なります。彼はパウロのことを心配するあまり、生死の境をさまようほどの苦しみを経験しました。何もできなかつたのではない。彼はそのようにしてパウロに仕えました。

今朝は「仕える」とはどんなことか考えてきました。主が私たちに心配し、父の御心と一つになりいのちを捨てられた。主が仕えてくださったから、今私たちは救われている。仕えることの難しい私たちですが、いただいている恵みの豊かさを今日もう一度味わいたいと願います。